

～みんなちがって みんないい (その6)～

今回はSLDに続き、AD/HD(注意欠如/多動症)についてお話しします。

発明家トーマスエジソンや織田信長、坂本龍馬、ナポレオン、そしてベストセラーとなった「窓際のトットちゃん」の作者である黒柳徹子さんなどがAD/HDだったのではないかとされています。

またカミングアウトしている有名人として、タレントの栗原類さんや真鍋かをりさん、ロックバンド「SEKAI NO OWARI」のボーカル深瀬さんや元ボーカルグループLittle Gree Monsterの芹奈さんなどもいらっしゃいます。

AD/HDもSLD同様、原因がはっきりしていません。脳の中枢神経に伝達異常があることは分かっているのですが、その原因は特定できていません。ただ、情報伝達系のホルモンの調整を行う服薬によって、特性の改善が見られるため、発現する原因は分からないものの、脳内の情報伝達ホルモンの問題が症状を引き起こしているのではないかと分かっています。

AD/HDは日本語名称からも分かるように、「不注意」「多動性」「衝動性」の3つの特徴があります。ただし、すべてのAD/HDの人に、3つの特徴すべてが表れるわけではありません。また特性によって「多動・衝動優勢型」と「不注意優勢型」「混合型」に分けることができます。「多動・衝動優勢型」を「ジャイアンタイプ」、「不注意優勢型」を「のび太タイプ」と形容することがあります。織田信長やナポレオンはジャイアンタイプ、坂本龍馬はのび太タイプといったところでしょうか。

「不注意」とは、集中すべき時に集中することができず、注意が散ってしまうことです。

「多動性」とは、落ち着きがなく、そわそわして、座っていても体や視線が動いたり、席を離れて自分の興味があるものに向かったりすることです。

「衝動性」とは、自分の感情をコントロールすることができず(抑えきれず)、即座に反応してしまうことです。

具体的には、

- ・音がした方や人が通る姿など、ちょっとした刺激にすぐに反応してしまう。

- ・集中する力が弱く、ボーっとしたり他のことにすぐ興味がそれたりしてしまう。
- ・一見すると話を聞いているように見えるが、頭の中ではまったく別のことを考えていて、話を聞き逃してしまう。
- ・深く考えず、ものごとをパッと見ただけで判断してしまう。
- ・結果を考えずに行動してしまう。
- ・興味のあるものは、すぐ触ったり手に取ったりせずにはいられない。

などがあります。

こういうことは幼児期や小学校低学年には、よくあることです。しかし、あくまでも「性格の範囲」であり、その状態が「同年齢の子どもたちに比べて、掛け離れている」、「学年が上がっても、なかなか成長が見られない」となれば、「適切な支援を必要としている」と考える必要があります。

AD/HDはSLDと同じように、成人後にもその特性が継続します。例えば「成功体験が忘れられず、パチンコなどのギャンブルが趣味になりやすい」「多動・衝動が強いと人とトラブルになりやすい」「車の運転中に、人の運転に対して文句を言いがち」「見栄を張って後先考えず、返済能力以上の物を欲しがったりする」などが見られます。

また「不注意」が強いと、仕事でミスすることが多いために、離職を繰り返したり、車で事故したりすることが多くなりがちです。

「性格の範囲内」で問題なく過ごせていて、後は環境に適応さえできていれば、仕事に就いたり自立して生活したりすることができます。ただ、前述した具体例のような特性が原因で、「十分に学習が身に付かなかった」「交友関係が適切に築けずトラブルが絶えなかった」などが少年期～青年期まで続いてしまうと、「自己喪失感」に捉われ「自己否定」するようになり、「社会不適応」を起こしたりすることもあります。逆に能力以上に自己有能感が高いため、うまくいかないことを周りのせいにし、上司が自分を分かっていないからだ勝手に解釈して、逆恨みしたりすることもあります。何よりも将来の可能性を狭めてしまうことが懸念されます。

失敗経験や劣等感が重ならないよう、医療・服薬等も利用しながら早期対応することで、二次障害の予防や自尊心の低下を防ぐことが大切です。